

春先の高温に対する農作物の技術対策

令和6年4月5日
農林水産部担い手支援課

令和6年4月4日14時30分に気象庁から高温に関する早期天候情報が発表されました。発表内容によると、関東甲信地方は4月13日ごろから気温が平年よりかなり高くなる（5日間平均気温平年差+2.7℃以上）ことが見込まれます。つきましては、以下の事項に注意し、農作物の管理に万全を期してください。

1 施設野菜、花き

- (1) 施設栽培では側面を開放するとともに、天窓の開閉や換気扇等を活用した換気を積極的に行う。また作物の光要求性に応じて遮光カーテン等を使用し、温度上昇の抑制を図る。循環扇は局所的な高温・高湿空気の滞留を防ぎ、室内温度・湿度の均一化が図られるとともに、作業快適性の向上が期待されるため、積極的に動かす。
- (2) ハウス内の急激な温度上昇後に一気に換気を行うと葉や生長点のしおれ、葉焼けなどの障害が発生しやすい。こまめな換気や遮光による温度管理の徹底を図るほか、積極的にかん水をして乾燥を防ぐ。
- (3) 作物の生長点等がしおれた場合は速やかに水を噴霧し、回復を促す。なお、しおれた状態での薬剤散布や葉面散布は薬害の発生が懸念されるため控える。
- (4) アブラムシ類、ハダニ類、アザミウマ類等の害虫の発生が早まるため、早期発見、早期防除を徹底する。

2 露地野菜

- (1) 地温抑制のため稲わらマルチの活用や畝間かん水により土壌水分の保持を図る。
- (2) 葉茎菜類では、チップバーンを防止するため、カルシウム剤の葉面散布を行う。
- (3) 果菜類では、不良果の摘果等、着果負担の軽減を図る。
- (4) トンネル栽培やハウス等での育苗は、高温になりすぎないように、早めに換気を行う。また、野菜苗等は乾きすぎないようにかん水を行う。

3 果樹

- (1) 高温に加え少雨条件が続いた場合は、刈草やわらマルチにより、土壌の乾燥を防止する。特に育成中の苗木は根量が少なく、干ばつによる生育障害を受けやすいので、地表面が乾いているようであれば、こまめにかん水を行う。
- (2) 草生栽培の園で草丈の高い園では草からの蒸散を防ぐため、草刈りを行う。

4 水稻

- (1) 育苗ハウス内の温度上昇により苗丈が伸びやすくなるため、十分な換気とかん水によりハウス内の温度上昇を防ぐ。
また、老化苗になる前に移植できるように早めに圃場を準備する。特に、高密度播種苗は老化が早まるため注意する。
プール育苗では、水温が上昇すると苗丈が伸びすぎるため、プールの水の交換を行い、水温を下げる。
- (2) 水温の上昇に伴いスクミリンゴガイの活動が活発になり、移植苗の食害が予想されるため、対策として移植後2～3週間まで4 cm以下の浅水管理とし、必要に応じて薬剤と組み合わせ早期の防除対策を徹底する。

5 小麦

- (1) 出穂期が近年と同様にやや早く、今後の高温によりさらに前進する可能性があるため、赤かび病の防除時期を逸しないように注意する。
- (2) 赤かび病は開花期から10日間程度が最も感染しやすく、この時期に雨が続くと発生が助長される。対策として、開花期（出穂後2～10日）に薬剤散布を行う。
- (3) 赤かび病の菌は植物残渣上で越冬するため、前年発生が見られた地域、ほ場では防除を徹底する。